教職科目Ａ，初等社会科教育法
担当教員：福田　喜彦

初等社会科教育法におけるＦＤ活動への取り組み

社会科教育講座・福田　喜彦

１．授業の目的と達成度

本授業は，社会科の性格，目標と内容，授業構成の仕方，指導計画と評価の方法などについて理解すると共に，実地講師や「授業研究」を通して社会科授業における実践上の諸問題や指導上の留意点について把握することを目的としている。

本授業では，シラバスのもとに，「社会科の授業原理」「社会科の内容構成」「社会科の学習方法」「社会科の学習指導計画の立案と作成」「社会科の学習指導のあり方」「社会科授業の評価と方法」の６つのテーマを中心に講義を進めた。本授業での到達目標は，①小学校社会科授業を分析，説明することができる，②小学校社会科授業の実践上の諸問題について，自分の考えをまとめ，論述できる，③学習支援案の立案を行いながら授業を創造，改善していくことができるの３点をめざした。

特に，本授業では，これまでに公開されたすぐれた社会科授業の実践に関する VTR，公立小学校で教壇に立っている現職教員による講話，愛媛大学教育学部附属小学校の教員による研究授業の VTR と学習指導案の分析など，学生たちが社会科の授業をできるだけ具体的なイメージをもちながら，受講できるよう資料や映像をもとにして授業を進めた。その中で，平成２０年に告示された新しい『学習指導要領解説社会編』に関する内容や近年の社会科教育研究の動向を踏まえた最新の理論や方法について学術的な視点から講じた。

２．実地講師の教職体験を生かした授業改善

本授業では，実地講師の教職体験を生かした授業への改善を試みた。ここでは，実地講師担当の授業を聞いて，①「社会的な見方や考え方を育てる社会科授業の指導とは」，②「体験的・問題解決的な学習を社会科授業で取り入れていくためには」，③「楽しくよくわかる社会科学習をつくるためには」，④「子どもを多面的・多角的に看取る評価を工夫していくためには」，⑤「これからの社会科授業づくりで特に，取り組んでみたいと思うことや気になったこと」の５点について学生に意見を出してもらった。本稿では，⑤に関する意見から学生の社会科への授業観を検討する。

「やはり，視聴者参加型報告会である。社会は調べ学習などが多く，発表の機会も多い。その発表の時間を有意義にするためにぜひ取り組んでみたいと思った。全員が参加し，報告することで練り合いや高め合いを可能にし，それらが充実することで社会的な見方や考え方を育成できるのである」「取り組んでみたいこととして，評価方法と意見交換の方法（楽しくよくわかる社会科学習）だ。評価は大抵，見学ならばそのまとめを評価していくが，そうではなく，事前～見学～事後へと，子どもの自己評価，また子ども同士による評価をもうけて，多角的に評価したい。また，意見交換の方法は，子どもの意見をもとに，授業を進めていく方法だ。そうすることで，子ども主体の授業となり，子どものモチベーションも上がると思う。しかし，そうすると，教師が発問を投げかけて，流れをつかまないと，まとめに収束しないまま授業が終わるのではないかと，少し不安である」「社会＝暗記というイメージがあり，社会はそういう教科ではなく，考える教科であるという事はいろいろな授業でやってきたが，暗記しなくてはいけない部分も多々あると思う。そこをどう取り扱うか，というのは私の疑問だったのだが，教師の工夫が対悦なのだと思った。先生の授業では，県名で「体の一部が入っているもの」などのような工夫で子ども達が県名自体に興味がもて，自分で探すことにつながっていく。教員はそのような発想が大切で，私もそのような授業のアイデアを考えてみたいと思った」（複数者による回答）

下線部は，実地講師の教職体験を生かした社会科授業で学生達が社会科の授業に対するイメージを具体的につかんでいるコメントと解することができる。講師の話から授業で発問をどのようにするか，授業の方法と流れをどのようにするのか，基礎・基本的な学習をどのようにするのか，子どもの評価をどのようにするのか，など自らの社会科授業観を育んでいる様子が看取できよう。

３．本授業に対する学生の意見と改善への視座

本授業の最後では，「初等社会科教育法」の授業に関する理論と実践を踏まえて，社会科の学習指導案づくりを実施した。その中で，疑問に感じたことや気がついたことを答えてもらった。以下は，複数の学生からの意見をまとめたものである。

「一つの単元の授業を構想することは今回が初めてであった。授業を構想する際に子どもの目線に立って，どうしたら子どもが学習しやすいかを念頭に入れて構想することに気をつけた。その時に，この単元のみを独立させるのではなく，前後の単元も考慮して構成しなければ，子どもの学習プロセスにつながっていかないことがわかった。例えば，導入で気候の様子を学習するときは，日本には四季があることが関わってくる。これは前単元の内容をふまえた学習である。そしてまとめの最後の授業では，自分たちの地域の特色を考え，産業に触れることで，次の単元の産業学習にも関わってくる。したがって，単元全体が関わってくることは当然であるが，特に導入とまとめは，その前後の単元と深く関わってくる。このことを教師は十分に考慮して，授業を構想する必要があると思った。また疑問点としては，単元に振り分ける授業時間数である。１年間の限られている授業時数で，どれくらいの時間を振り分けたらよいのかが疑問である。その点について，もう少し学んでいきたいと思う」（国土学習，５年生）

「今回のレポートにあたって，社会科の授業において評価の観点の面での難しさを実感した。評価は，（中略）子どもを評価するだけでなく，自分の授業がどうだったのか，という評価にもつながる。そして，どの人が評価しても同じようになるようにしっかりとした評価基準をもってのぞまなければならない。口でいうことは簡単だが，実際に評価基準を明確にする，というのはペーパーテスト以外に関してはものすごく難しいのではないかと思う。子どもをワークシートや発言において，いかに評価していくか，そういったことは今後の課題なってくると思う。また，小学校の授業案は中学校と比べて，子どもの実態を把握しにくかった。なぜかというと，自分が小学校のときの社会科の学習を覚えていないし，ましてどのように考えながらしていたかというのは，まったくわからないからである。そのため，小学生がこの指導案通りに思考が流れていくか，そこが作る上で難しかった」（産業学習，５年生）

「小学校の社会科の学習指導案を作成してみて，いかに児童に興味・関心をもたせるか，ということが難しかった。特に授業の主要部分に迫っていくための導入が大事であると感じ，試行錯誤を繰り返した。そのためには，体を動かしたり，クイズを行ったり，度肝を抜くようなものを提示したりと，インパクトのあるものを授業の最初でやることが効果的なのではないかと考え，今回はクイズから入ることにした。クイズで興味をもち，それからの学習活動に意欲的に取り組んでほしい。また，予想される子どもの意識の流れのところは，いろいろな意見や考えを予想しなければならず，教師はどんな意見が出てきても返答できるようにしておく必要があると感じた。そのためには，指導案はもちろん，教材研究は念入りにする必要があると思った。教材研究は時間をかければかけるほどいいと思う。一つ一つの単元を深めることで自分が伝えたい思いや考えを児童に適切に教えることができるのではないだろうか。学習指導案はあくまで案なので，実際にやってみないと善し悪しを判断できないし，新たな課題を見つけることもできない。自分の作った指導案で授業をしてみることは大切であると思った。今年の９月には教育実習を控えているので今回，初等社会科教育法で学んだことを活かすことができたらいいと思う。指導案作りは大変だったけれど，自分にとって有意義なものとなった」（地域学習，３・４年生）

下線部に示したように，学生は指導案作りを通して，社会科の学習単元の構想，社会科授業での子どもの評価，社会科の教材研究の方法，子どもが興味・関心をもつ社会科授業など多様な視点から社会科授業をどのように構成していかなければならないかを学んでいた。一方で，学生からの疑問を来年度の授業に生かす方法が必要である。

４．本授業の総括と次年度へ向けた課題

本授業では，実際に学生が作成した指導案をもとにして，模擬授業を実施することができなかった。５０分の時間配分を考えながら，子どもの思考や学習活動に合わせて授業を進めていくためには，学生がみずからの指導案をもとに授業を行うことは社会科の授業力実践の向上に当たっても必要なことである。しかし，３年生から６年生までの社会科の学習領域を講じながら，学生が社会科の授業をできるだけ具体的なイメージをもって，受講できるように資料や映像をもとにして授業を進めていったため，授業の内容が多岐にわたり，模擬授業や検討会を実施するまでには至らなかった。今後の授業計画のあり方を再考したい。